

総評 2022.12月分 杉本真維子

「夜明けには天皇陛下になる君を／呼び捨てにした最後のハイウェイ」 源楓香（北海道）

「天皇陛下」という言葉の唐突さが効いています。その唐突さが生み出す別次元の空気が、遠のく存在を前にした主体のさびしさを和らげています。

「箱ティッシュ／ぎっしり／詰まって取りづらい」 吉沢美香（宮城県）

白くやわらかなものの量感になぜか打たれました。理由のわからなさにも惹きつけられます。

「耳朶が冬の空へと逃げたがる」 吉沢美香（宮城県）

寒さのあまり、身体を置きざりにして冬空のほうに同化しようとする耳が面白いです。剥き出しの耳たぶのつめたさがリアルに伝わります。

「真夜中を待つ夕闇みたいに／悪意は徐々に色彩を失う」 まちりこ（埼玉県）

悪意が元は色彩を持っていたという仮定は、それがはじめは悪意ではなく、何か別のもの——善意であった可能性を浮上させます。心とはつねに注意深く点検しなければならないものなのだと改めて思いました。

「年越の首都高明るさに続く」 山本先生（東京都）

なんというまばゆさ。年を跨ぎ、地を移動する私たちの活動性を祝いたくなる作品です。

「化粧水の第一印象は／あらそういぬを／雪に規範づけるか次第／だとして」 郡司和斗（茨城県）

化粧水というものから受けとる違和感を、何にも媚びることなく清潔に説明しようとすれば、このようになるでしょう。

「雪踏むとしししっていう／それ以外もう言うことがない」 植村日向（愛知県）

「ししし」という沈黙のオノマトペが巧みです。白い雪を踏む感触にはたしかに言葉を押し込めて黙らせたような充満があります。

「白菜を記憶のように剥がしつつ」 土田真央（滋賀県）

白菜をつかんだときの手触り、剥がすときに指にかかるおもさ。記憶という目に見えないものに触れる経験がここにあります。

「しゃぼん玉／ぜったいそんなことはない」 土田真央（滋賀県）

この説得力は何だろう、と驚きました。儂さと断言の接続にその秘密はあります。

「美しい車のコマーシャルに／引き締まる／心の余裕の部分」 豊富瑞歩（茨城県）

購買力をあおる目的でつくられた映像と、そうでない映像の違いは、こういうところにあるのかもしれません。商業メディアの一つの限界点を見た気がします。

「野次馬のみんな手袋してロケ地」日下部友奏（群馬県）

主体がいるこちら側は、素手で炬燵にあたってテレビを観ているのかもしれません。「手袋」という違和感がむこうとこちらを隔てるものとしてあり、私の位置を示しています。

「平日にひとり泳いでいて／区営プールのぬるい水を誤飲する」松下誠一（東京都）

誰にも知らない些細な失敗。わたししかわたしを知らないということのとてつもない重責と孤独が、軽妙さをもって書かれているように思います。

「しん とする中に／ドンと音が鳴る／それは怒りをはらんでいる／くりかえす」五代康成（埼玉県）

ドンと叩くのは誰か。怒りを抱えているのは誰か。それはなぜくりかえされるのか。一枚の壁のようなものを隔てて、誰かと「わたし」の心の痛みが繋がっています。

「卵かけご飯みたいにどうるるんと／夢の中から抜け出した午後」こはくいろ（大阪府）

「どうるるん」のむきだしで圧倒的な存在のあらわれに注目しました。目覚めたばかりの午後のこどくな身体が軽やかに描かれています。

「生活リズム崩しきって／草書体の死が滲む」小沢旭（山梨）

賀状の草書体でしょうか。炬燵にあたって賀状を読みながら、年末の暴飲暴食を反省している……そんな想像の一コマのなかにちらりとのぞいている「死」にドキリとしました。

それでは次回も投稿を楽しみにお待ちしています。